

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(4)

BUNPU-CHOSA

1986

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(4)

BUNPU-CHOSA

1 9 8 6

館林市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、館林市内全域を対象とする埋蔵文化財分布調査のうち、昭和61年度に実施した調査の結果をまとめたものである。
2. 本年度の調査は、5ヶ年計画の第4年次にあたり、市内の東北部（大島地区）・旧館林町を中心として、第3年次までの未調査地域を対象に実施した。
3. 本調査の主体は、館林市教育委員会であり、文化振興課文化財係が担当主管となり実施した。

教育長 堀越亘
教育次長 伊藤敏夫
担当主管 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係
課長 橋本一郎
係長 三田正信
学芸員 岡屋英治
主事補 黒沢文隆(担当)
調査補助員 藤坂和延

4. 調査の期間は、昭和61年4月～昭和62年3月である。
5. 調査に伴う諸費用は、国庫補助・県費補助により館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレース・写真撮影は、黒沢・藤坂が中心になって行ない、文章・編集は、黒沢・藤坂が行った。
7. 調査にあたり、調査協力者として次の諸氏の協力を得た。

感謝いたします。

小島敦子 石坂茂
原雅信 徳江秀夫
藤巻幸男 岩崎泰一

本 文 目 次

例 言	I
本 文 目 次	II
図 版 目 次	III
写 真 目 次	III
第Ⅰ章 調査の目的	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	2
第Ⅲ章 館林の環境	4
第Ⅳ章 調査の内容	7
第1節 大島地区	7
大島下恩途遺跡	8
第2節 郷谷地区	14
第3節 多々良地区(鶴生田川上流域)	16
第4節 赤羽地区	19
第V章 まとめにかえて	23

図 版 目 次

第 1 図	調査実施地域図	3
第 2 図	館林の地勢と現況・遺跡分布図	5 ~ 6
第 3 図	大島地区的地形と遺物の分布 (1)	9 ~ 10
第 4 図	大島地区的地形と遺物の分布 (2)	11 ~ 12
第 5 図	郷谷地区的地形と遺物の分布	15
第 6 図	多々良地区(鶴生田川上流域)の地形と遺物の分布	17 ~ 18
第 7 図	赤羽地区的地形と遺物の分布 (1)	20
第 8 図	赤羽地区的地形と遺物の分布 (2)	21 ~ 22

写 真 目 次

写真 1	調査風景 (1)	1
写真 2	調査風景 (2)	2
写真 3	大島地区的景観	7
写真 4	大島下悪途遺跡全景	8
写真 5	大島下悪途遺跡表採遺物	13
写真 6	郷谷地区的景観	14
写真 7	多々良地区(鶴生田川上流域)の景観	16
写真 8	赤羽地区的景観	19

第Ⅰ章 調査の目的

本市における埋蔵文化財包蔵地に対する基本的な調査は、昭和46年群馬県遺跡地図作成時に実施されたままであり、その後の環境変化に対しての追調査はなされていない。

文化財保護のための基礎となる遺跡台帳についても同様である。

土地の再開発の著しい近年、既に破壊された包蔵地があつたり、未周知の遺跡が発見されるなど、台帳が本来の意味を失い、包蔵地の管理や開発事業との調整において、支障が生じてきている。

このようなことから、埋蔵文化財包蔵地に対し、精度の高い分布調査を実施し、台帳の整備をはかるとともに、今後の埋蔵文化財の保護・保存計画を策定することを前提として、昭和58年度より本調査を開始した。

本調査では、単に遺跡の存否という問題だけでなく、館林における地域性を考える時の材料となる調査を行うこと、過去から未来へ向って託された人間生活に対する現時点での記録となり得ることを大きな目的としている。



写真1 調査風景(1)

第Ⅱ章 調査の方法と経過

本年度の分布調査は、5ヶ年計画の第4年次の調査として、大島・館林地区及び、昨年度までの未調査地域を対象として実施した。

調査にあたり、基本方針として、遺物・遺跡の存否確認だけでなく、地形変化の確認を踏まえた上で遺物の時期比定、分布状況の把握に心掛けた。

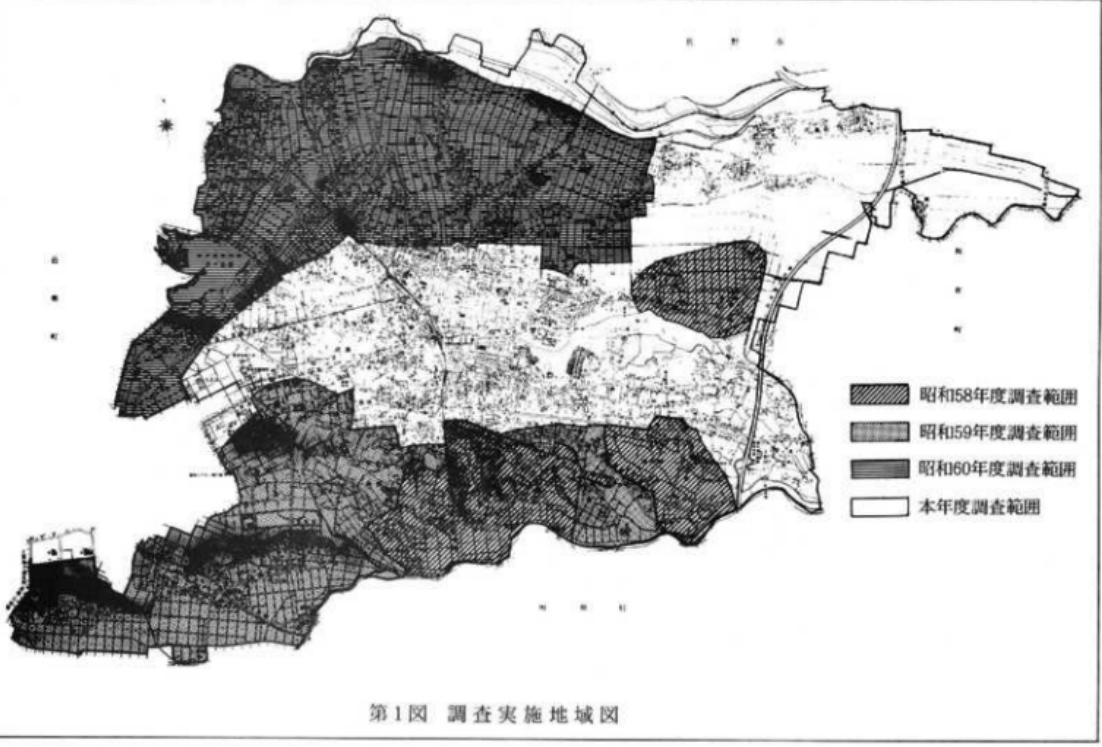
夏期については、農作物の関係から、遺物等の確認が不可能であるため、地形確認調査を実施し、冬期に、夏期に作成した現況地形図を基に台地に沿って踏査を行い、遺物の採取・分布状況の確認・古地形の復元をした。

又、併行して、地元の土地利用者等から、耕作時の状況・土地改良前の状況等の聞き取り調査も極力実施した。

遺物・地形のマッピングには、2500分の1の都市計画図を使用し、現地で作図を行い、調査終了後整理・補正することを心掛けた。



写真2 調査風景(2)



第三章 館林の環境

館林市は、関東地方のほぼ中央に位置し、群馬県にあっては南東に延びる東毛地方の中核都市として位置づけられる。

北に渡良瀬川、南に明和村を挟み利根川が東流し、本市の南東約16kmで合流する。

本市の地形を概観すると、「邑楽・館林台地」と呼ばれる低台地（標高約16m～25m）と、利根川・渡良瀬川の両大河によって形成された沖積低地（標高約14m～16m）に大別される。

「邑楽・館林台地」は、太田市高林から、大泉町・館林市・板倉町へと連なる洪積台地である。台地を構成するのは、河川堆積物と考えられる疊・砂・シルトの瓦層であり、その上部に中部・上部ローム層が被覆している。形成時期については、下末吉海進時まで遡るといわれる。

台地西端に沿って、「鞍掛山脈」と呼ばれる内陸古砂丘が連なる。標高は高根で33mを示す。

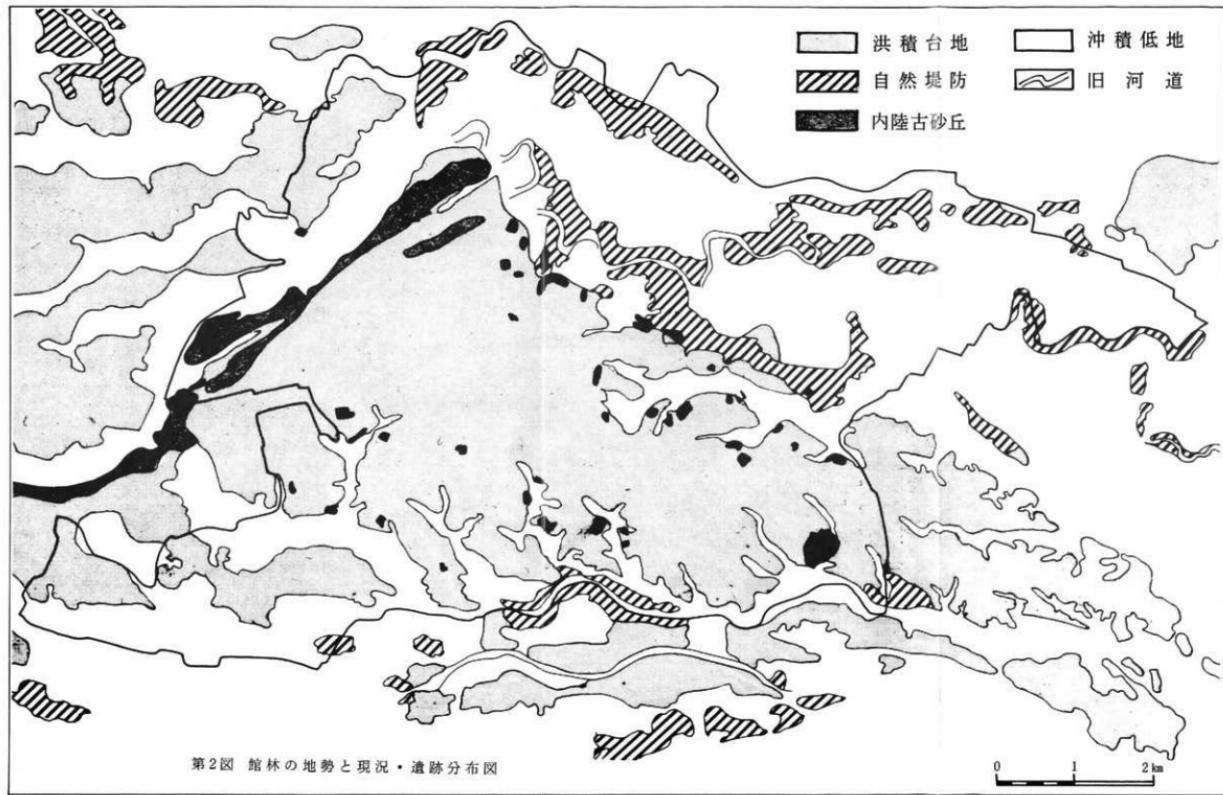
台地周辺部には、沖積低地が広がっている。台地との境では、開折谷の侵食が著しく、谷頭に多くの池沼や谷地を形成させている。また、これら低地中には、自然堤防や旧河道を確認することができる。

『群馬県遺跡台帳』（昭和48年）を見ると、市内所在の遺跡数は46である。

この台帳を中心に遺跡分布を概観してみると、地形との係りが大きく、各池沼や河川を中心的に時代的にまとめることができた。すなわち、旧石器時代の遺跡の多い多々良沼沿岸（内陸古砂丘上）、縄文時代早期～中期の遺跡が集中する城沼周辺、縄文時代中期の遺跡が多い旧矢場川周辺、縄文時代中期～後期の遺跡が多い茂林寺沼・蛇沼周辺、古墳時代の遺跡が多い近藤沼周辺、古墳分布の多い城沼・多々良沼周辺といった6つのまとまりである。

しかしながら、昭和58年度より実施中の分布調査の結果を加味して考えてみると、遺跡と地形の係わりは明確であるが、局地的な地域性はみられず、上述のような6つのまとまりも妥当とはいえない。

今後は、分布調査・ボーリング調査等の結果を踏え、環境の変化と遺物の分布について再考して行きたい。



第 IV 章 調査の内容

第1節 大島地区



写真3 大島地区の景観

大島地区的地形と遺物の分布状況を第3図・第4図にあげた。

当地区は、沖積低地の中に自然堤防が形成され、現在の居住空間としてその上に集落が所在する。また、沖積低地の中に自然堤防と約0.5mの比高をもつ微高地が随所で確認できる。

昭和46年の台帳には、中世の城館址として北大島館跡が登載されているのみであった。

遺物の分布は全体的に薄い。表採される遺物は土師器がほとんどで、時期が比定できる遺物は少ない。注目できる遺物としては、本郷の大島診療所の北東で採取された内黒の土師器片、上新田の大島神社裏の須恵器片があげられる。

当地区は近年まで、出水（洪水）にあっており、出水に伴なう土砂の堆積が考えられる。また、後述する大島下悪途遺跡の存在から、現在沖積低地内にも遺跡が存在する可能性が充分予想できる。

予想される遺跡としては、縄文時代～歴史時代（平安時代）の長きに及ぶ。

大島下悪途遺跡

大島下悪途遺跡は、渡良瀬川の河床中に所在し、古墳時代和泉期を中心にして、縄文土器、古墳時代石田川期～鬼高朝・奈良・平安時代の土師器を採取できる遺跡である。

遺跡地は、渡良瀬川に秋山川が合流する地点の上流約300mの地点で、河川敷から渡良瀬川へ張り出した半島状の地形上に所在する。

本遺跡を載せる河床は海拔約14.5mで、堤防内の現在の集落を載せる自然堤防との比高約4m、沖積低地との比高約2.5mである。

河床は、灰褐色のシルト質の土壤で、一部水面上に露呈した部分に黒褐色土壤の堆積も認められる。

本遺跡の発見は、河床上に堆積した砂の砂取り作業により河床が露呈したことによる。

本発見により、現在の自然堤防及び沖積低地の下にも遺跡地の拡がりが充分予想される。

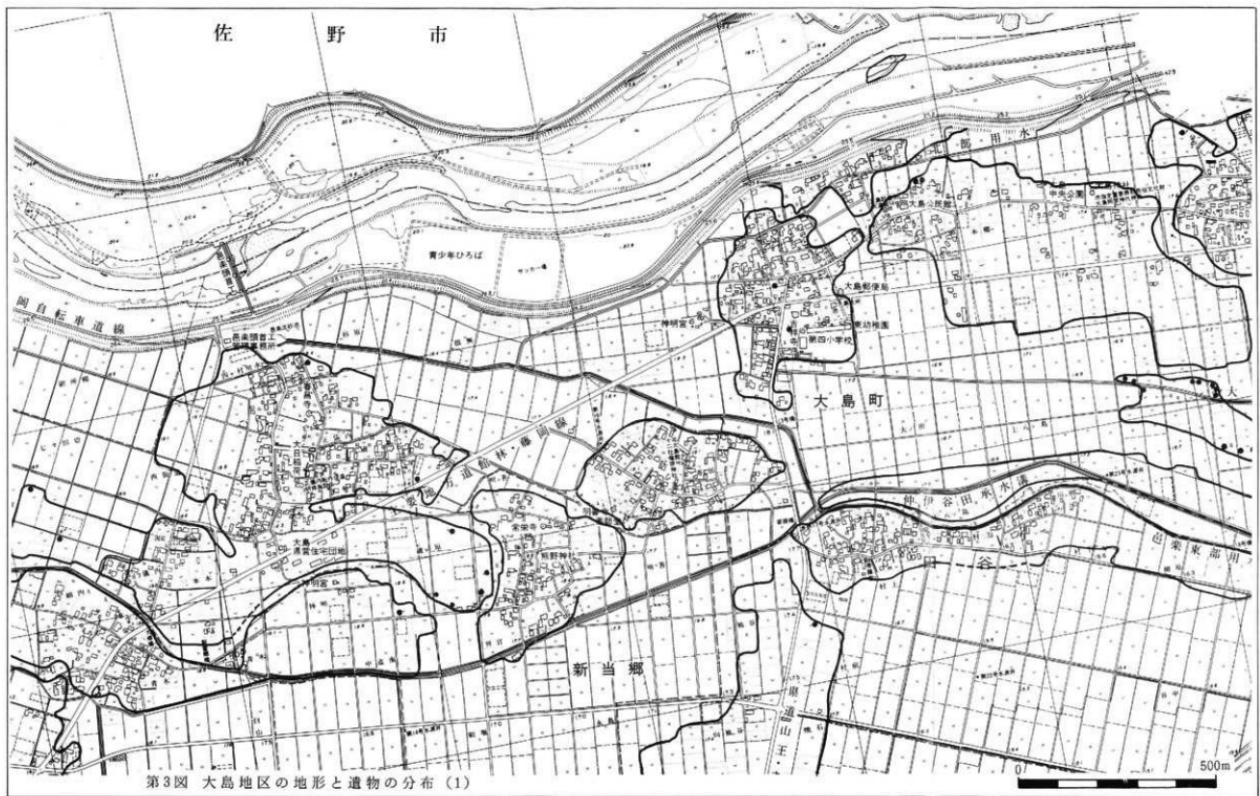
今後、大島・渡瀬・郷谷地区の遺跡の存在についての、一つの問題提起となるとともに、充分な検討が望まれる要素の一つである。

採取された遺物は非常に多く、現在整理作業中であるが、復元できたものに小型台付壺1・甕2・壺1・高台1・壙2・台付甕からの転用高壺がある。

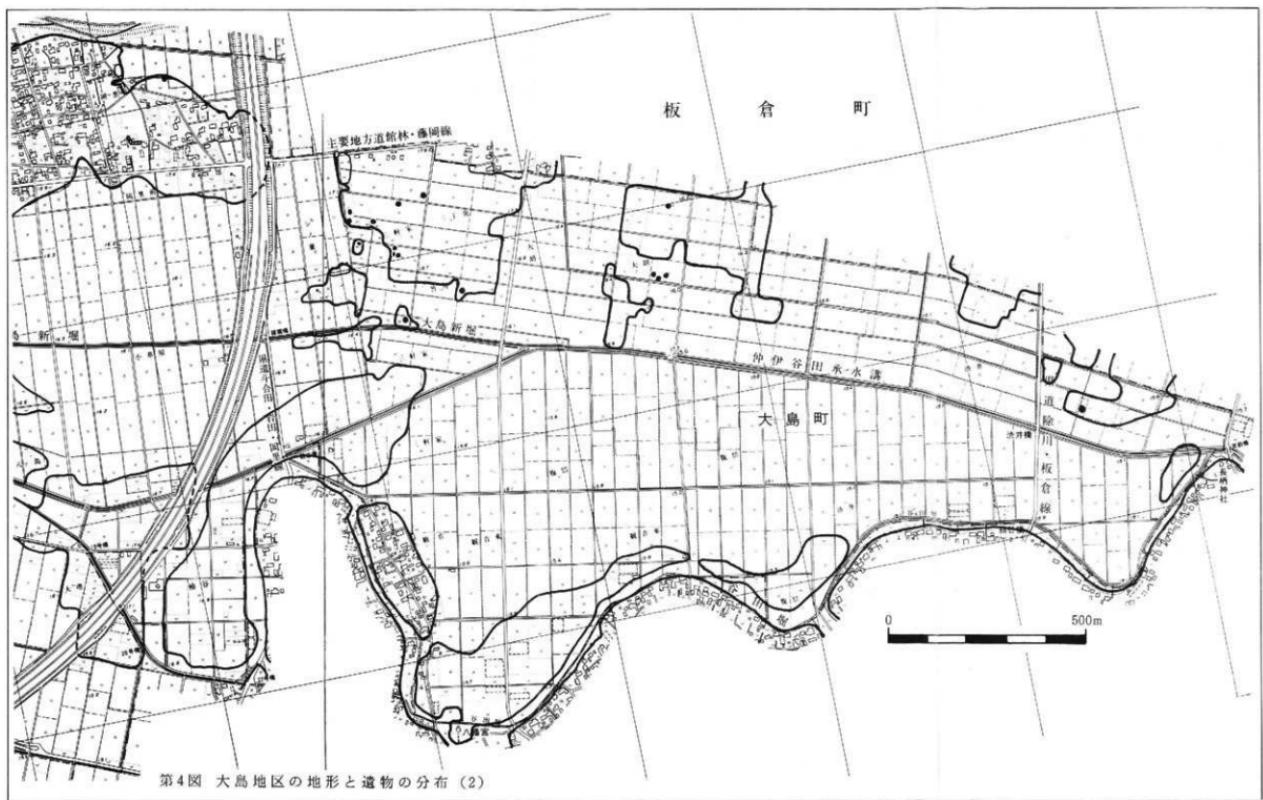
また破片も大きなものが多く、復元はまだ充分でないものの高壺・壺・壙・甕等その器種も



写真4 大島下悪途遺跡全景



第3図 大島地区の地形と遺物の分布(1)



第4図 大島地区の地形と遺物の分布 (2)

多い。

以下、復元できた遺物について説明を加える。

小型台付壺は、単口縁、体部には櫛目調整が施されている。口径10.5cm、器高14.5cmを計る。

壺は2個体復元できた。1個体は薄手で体部に櫛目調整が施され、口径16.0cm、器高23.0cmを計る。もう1個体は厚手で、体部ヘラミガキが認められるほか、ヘラ削りも一部に認められ、口径16.5cm、器高30.0cmの厚手のものである。

壺は、体部櫛目調整後、丁寧にヘラミガキされた口径13.5cm、器高28.5cmのものが復元できた。赤色塗彩のあとが認められるほか、底部は焼成後、意図的に打ち抜いたものと思われる。

高台は、口径7.5cm、器高8.0cmで、脚部内側を除いて全面に丁寧なヘラミガキが施されている。

壺は、口径8.0cm、器高8.0cmの丸底の壺で、ヘラ削りによる器面調整が認められるもの1個体。口径9.0cm、器高7.0cmの平底のもの1個体の計2個体が復元できた。

転用高杯は、口径14.0cm、器高8.0cmで、櫛目調整された台付壺から転用と思われる。



写真5 大島下悪途遺跡表採遺物

第2節 郷 谷 地 区



写真6 郷谷地区の景観

郷谷地区的地形と遺物の分布状況を第5図にあげた。また、当地区北部（新当郷・田谷）の地形と遺物の分布状況は、第3図、第4図にあげてある。

当地区は、南部の洪積台地に連なり城沼に平行する自然堤防と、北部の沖積低地中の旧河道に平行する自然堤防の2つの容装を異にする地形に大別できる。

北部の自然堤防上における遺物の分布は薄く、かつ平安時代の土師器がほとんどである。

南部の自然堤防上の遺物分布も北部に比べやや濃いものの全体として薄い。採取された遺物は、古墳時代後期から平安時代までに及び北部に比べ遺跡の存続期間は長い。

また、南部は山王山古墳も、存在するなど古墳時代以降の遺跡の拡がりが予想できる。

縄文時代に比定できる遺物の採取はなかった。

北部については、大島地区同様に自然堤防・微高地下もしくは沖積低地中に遺跡の存在が充分予想できる。

近年、遺跡地として周知された遺跡に、古墳時代前期の住居跡及び遺物の確認された尾曳町遺跡が当地区に所在する。



第5図 郷谷地区の地形と遺物の分布

第3節 多々良地区（鶴生田川上流域）

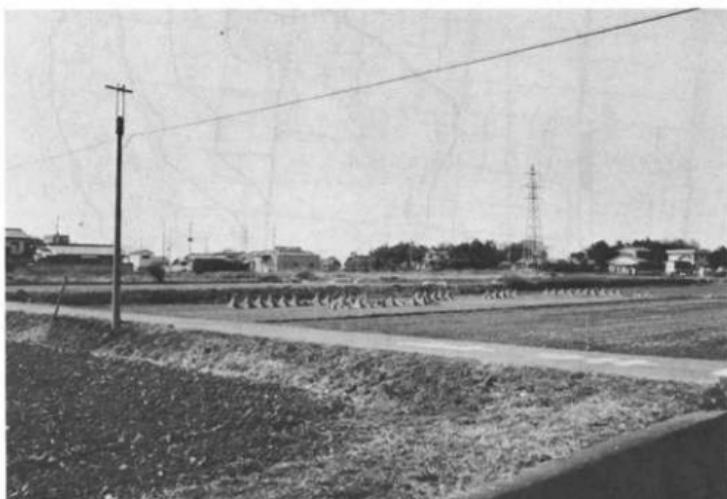


写真7 多々良地区（鶴生田川上流域）の景観

多々良地区（鶴生田川上流域）の地形と遺物の分布状況を第6図にあげた。

鶴生田川は、館林台地を東西に開折し東流し城沼へ至り、さらに東流して明和村へと至る。その上流域は広く、6本の支谷が認められる。

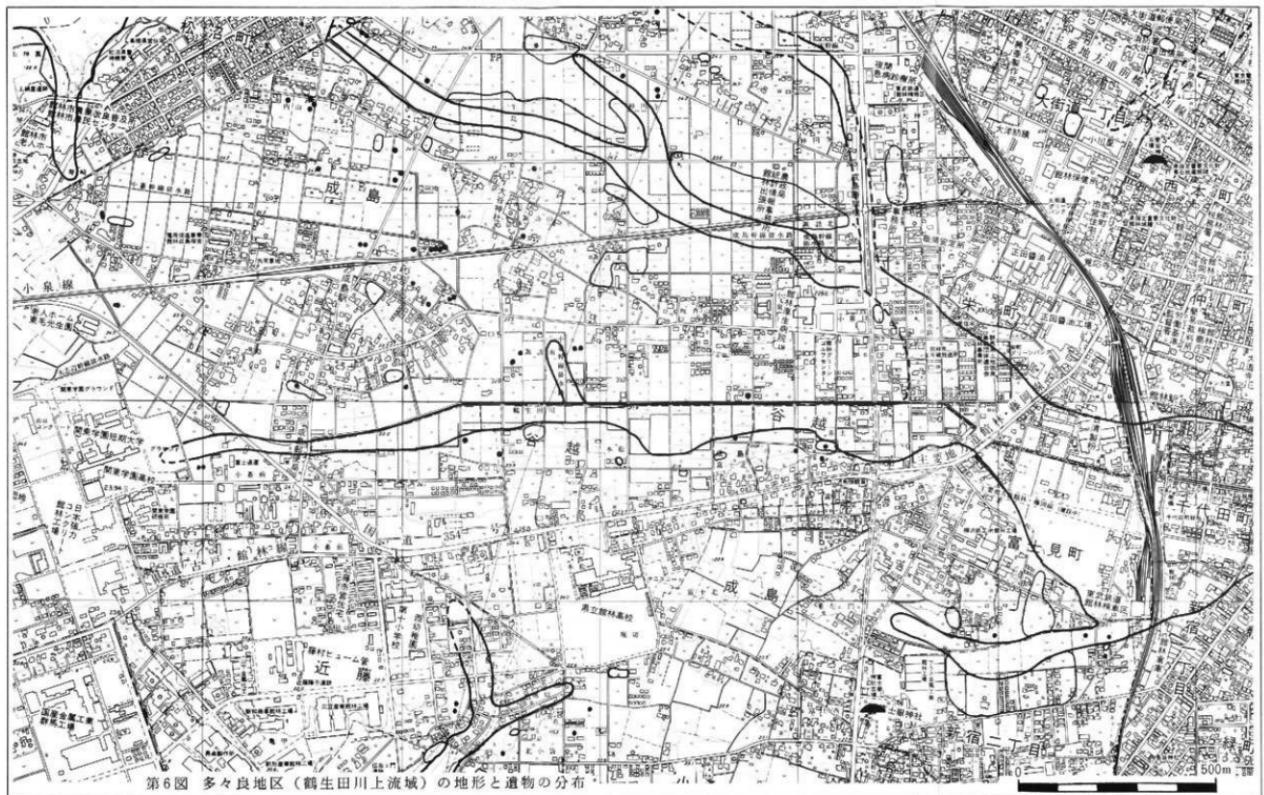
縄文時代の遺物は、広範囲の集中は認められなかったが、小蓋前から伸びる支谷の南岸に3ヶ所の集中が認められる。

弥生時代の遺物は、希薄であり集中場所もなかったが、小蓋において1片、弥生式土器の破片と思われる遺物の採取をみた。

古墳時代の遺物は、若干ふえるものの広範囲にわたっての集中は認められない。

平安時代に入って遺物は広範囲にわたって分布し、集中場所も随所に認められる。特に広範囲にわたって集中が認められる場所は、成島妙円寺の2本の支谷の合流点周辺、新宿二丁目、富士見町の富士嶽神社方面からの支谷の両岸である。

当地区は、土地改良が早かったのか、随所で台地のカット、沖積地の埋め立てが認められ、古地形の把握の難しい地区であった。



第6図 多々良地区（鶴生田川上流域）の地形と遺物の分布

第4節 赤羽地区



写真8 赤羽地区の景観

赤羽地区の地形と遺物の分布状況を第7図・第8図にあげた。

当地区は、城沼南岸の洪積台地を開折した谷地が城沼へ向かって複雑な地形を形成する北部（羽附）と、谷田川へ向かって開折谷が形成される南部（赤生田）に大別できる。

昭和46年の台帳作成の時も当地区には、10ヶ所（46ヶ所中）の遺跡が登載されており、遺跡の存在の密な地区であった。

縄文時代の遺物の分布は、大袋Ⅰ・大袋Ⅱ・花山東・下志柄の各遺跡及びその周辺地で広く分布するほか、古城沼周辺において早期茅山式～中期加曾利E3式までの遺物が散在する。

弥生時代の遺物は、道溝遺跡周辺で若干採取できたものの顯著な集中が認められるまでに至っていない。

古墳時代の遺物は後期鬼高期に入っての遺物が広範囲にわたって採取されるものの集中は認められない。

奈良時代の遺物は、古城沼周辺で数ヶ所集中が認められ、平安時代に入っての遺物は隨所で集中が認められる。



第7図 赤羽地区の地形と遺物の分布（1）



第8図 赤羽地区の地形と遺物の分布 (2)

第V章　まとめにかえて

本年度までの調査をもって、館林市内全域の分布調査をほぼ終了することができた。この成果は、来年度、補充調査及び資料整理を実施し、遺跡分布地図としてまとめられる予定であるが、ここでは、本年度の調査において確認されたことを述べておきたい。

本年度は、大島地区を中心に、郷谷・赤羽・多々良地区の未調査の地域を調査対象とした。

以下踏査によって確認された遺物分布の状況を時代を追って示したい。

縄文時代

全体的傾向として、先土器～縄文時代については、『群馬県遺跡台帳』（昭和48年）登載の遺跡が再確認されている。但し、水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡では、土地改良等の為か遺物等は採取されていない。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、台帳に道溝遺跡（昭和45年東北自動車道館林インターチェンジ建設に伴い調査）が見られるのみである。分布調査で遺物が確認されたのも僅かであり、今回も確認できた数は少ない。

古墳時代～平安時代

この時期のものとして特筆されるのは、大島下悪途遺跡の発見である。

渡良瀬川河床からの発見であり、本市における河川の氾濫、流路変遷の一端を窺い知ることができ、遺跡分布を考える上での、古地形復元の重要性を示すものである。

又、この発見により、現在の自然堤防及び沖積低地下に遺跡が存在する可能性を予想させる。

奈良・平安期の遺物は、多く確認することができる。その集中箇所は、台帳登載の数を超える。本年度調査した大島・郷谷地区では、自然堤防からも採取することができた。

全体的にみて、自然堤防上で確認されるのは、奈良・平安期の遺物であり、環境変化と人間生活の係り合いを示すものとも考えられる。

以上、概略であるが、調査において確認されたものを述べてみた。今後については、ボーリング調査等のデーターを踏まえ、環境の変化を考えるとともに、遺物分布との係りを再考したい。そして、それを基に館林市の遺跡の認識を深め、今後の埋蔵文化財保護の糧としたい。

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(4)

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 中塚印刷所

発行年月日 昭和62年3月25日



文化財整復シンポルマーク
ふるさとの文化と歴史を見なおそう